

山下道代と鹿児島県立女子専門学校

木戸 裕子

キーワード 鹿児島県立女子専門学校 鹿児島の女子教育 鹿児島

の高等教育機関

女子の高等教育 山下道代

昨年、令和五年、鹿児島県立短期大学の前身鹿児島県立女子専門学校卒業生の山下道代氏の著作と原稿がご遺族から寄贈された^{注1}。氏は、鹿児島県立女子専門学校卒業後、設立間もない国立国語研究所に就職、その後独学で平安中期の和歌を中心とする日本文学研究者となられた。寄贈された著作にはそれら古典文学の研究書のほかに、鹿児島県串木野市で過ごした幼少期や専門学校時代の思い出を含むたくさんの随筆も含まれている。また、自筆の略年譜も添えられていた。これらは終戦直後の鹿児島における女子の高等教育に関する貴重な記録でもある。県立女子専門学校設立の経緯とその沿革、教育課程、学生生活全体については、すでに鹿児島県立第一高等専攻科・鹿児島県立女子専門学校同窓会による六十周年・八十周年記念誌^{注2}や鹿児島県立短期大学四十周年記念誌^{注3}によりまとめられているが、そこで学んだ学生個人の記録は思い出としていくつかのエピソードが掲載されているだけである。その中で、県立女子専門学校国文科で学んだ山下道代氏の生涯をたどることは、終戦直後の鹿児島の女子高等教育に対する当事者の思いをうかがい、県立女子専門学校が果たした役割を考える一助となるものと考え、ここにまとめる。

一 鹿児島県立女子専門学校と鹿児島の女子教育

はじめに、鹿児島県立女子専門学校について、先述した同窓会の六十周年誌、八十周年誌、及び県立短大四十周年誌に基づき述べる。

鹿児島県立女子専門学校は、終戦からまださほど間がない昭和二十二年（一九四七）に開設された、女子のための高等教育機関である。鹿児島県には戦前から県立第一高等女学校を卒業した生徒のために修業年限三年の専攻科が作られていた。高等女学校の専攻科は明治三十二年の高等女学校令によつて設置され、これにより高等女学校の法的、制度的地位が高まり、女子の中等教育機関が完成した。しかし、専攻科はあくまでも中等教育の修了後に特定分野の教育を施すものであり、女子に対する高等教育機関とはいえなかった。専攻科が高等教育機関となるのは、大正九年七月の改正高等女学校令による。県立第一高等女学校専攻科もこの改正を受けて大正十一年四月に新設された。これは全国でも早い設立であり、九州では私立の活水女子専門学校（長崎）、熊本県立第一高等女学校専攻科に次ぐものであった。しかしながら、この時の専攻科は家事・裁縫に重点をおくものであり、英語が随意科目、数学がないなどの特徴があった。この後、昭和三年にはカリキュラムや教員、施設設備が整備され、家事科を主とする第一部、裁縫を主とする第二部に分け、専攻科を卒業した者は無検定で中等学校の教員資格が与えられるようになり、高等教育機関として形が整った。専攻科は第二次世界大戦中も存続していたが、戦争末期の昭和十九年、二十年には学生達は勤労動員のため鹿屋海軍工廠に派遣された。昭和二十年六月の鹿児島大空襲により鹿児島市内は壊滅的な大被害を蒙ったが、第一高等女学校の校舎は全焼を免れ、終戦後の同年十一月に授業が再開された。

第一高等女学校専攻科は戦後も存続していたが、昭和二十年十二月に「女子教育刷新要綱」が閣議で諒解されたことで、女子大学の設置

と国立大学への入学が可能となった。そのための大学入学資格として女子専門学校卒業が認められたのである。この変化の中で、鹿児島県でも独立した教育機関としての女子専門学校の設立が求められた。第一女子高等学校専攻科の教育内容は女子専門学校に準じており、専攻科を修了した学生にも大学入学資格は認められていた。しかしながら、あくまで中等教育機関である女子高等学校の附属であり本科の延長と考えられ、規模が小さく独自性に欠けることなどから、専攻科の在校生、卒業生、教職員らから女子専門学校への昇格運動が起こり、昭和二十二年六月に鹿児島県立女子専門学校開学式が行われた。

鹿児島県立女子専門学校の設立は全国の公立女子専門学校の中でも最後に位置し、女子専門学校は戦前の旧学制に基づくものであった。同年三月に公布された教育基本法・学校教育法により県立女子専門学校設立の根拠となる専門学校令が廃止されたので、わずか四年間しか存続せず、四回の卒業生三〇六名を輩出したに過ぎなかった。

しかしながら、鹿児島県立女子専門学校は、当時の鹿児島県の女性が「女子の最高学府」^{注4}として新しい高等教育を学ぶ場を求め、それに応える関係者の熱意によって作られたのである。それまでの第一高等女学校専攻科は、第一部（家事）・第二部（裁縫）のみであったが、県立女子専門学校では、それに加えて国文科・英文科の二科が新設された。この二科新設について、中村政雄校長（事務取扱）の談話が昭和二十二年六月十六日の南日本新聞に掲載されている。

女専（女子専門学校）の経営方針は今までの専攻科のようなものと全然異なり、家政や被服など女子を封建的な家庭にしばりつけるような科目から、英文、国文等の学科に重点をかねていく。専門学校の大学昇格にともない、本校も大学になることを考慮に入れており、そうなった場合は男女共学の建前から男子にも入学を許すはずである。こゝに、二年の間はおくれた女子

の知識を男子なみに引き上げることに努力を集中したい。とにかく四科をそろえた女専は全国でもまれで、本校の出現は鹿児島の女子教育に一つの時期をかくするものであらう。^{注5}

中村は、昭和二十一年四月に第一高等女学校校長に着任し、県立高等女学校発足にあたって高等女学校校長となったが、そもそも第一高等女学校校長着任が高等女学校開設を見据えてのものであった。中村は熊本旧制第五高等学校を卒業後、東京大学文学部独逸文学科を卒業、同研究室の助手を経て日本女子大学のドイツ語担当の教授となった。その間『日本女子大学四十年史』を執筆するなど十八年に渡って戦前から戦中の女子高等教育に尽力してきた^{注5}。それを三顧の礼をもって招聘した第一高等女学校・県立女子専門学校の、鹿児島県の女子教育にかける熱意が推しはかれる。中村が書いているように、県立女子専門学校の設立は、遠からぬうちに四年制大学に昇格することを見越したものであらう。若山牧水主宰の「創作」社人でもあった中村は、後年、昭和三十三年に、歌集『手ざりかたき夏草』を上梓しているが、その後記に次のように書いている。

終戦の翌年私は招請をうけて目白（筆者注…日本女子大学）を辞し、鹿児島に赴任することとなったが、目白時代は、私にとつてはいはば、平穩無事な、防波堤に囲まれた内港のような生活であったが、鹿児島では全く反対の生活が私を待っていた。赴任したその年から女子専門学校設立の運動が始まり、この設立に引続いて更に短期大学創設の運動を起こさねばならなかった。幸いにして二十五年短期大学も設置認可される事となったが、充実発展はこれからの仕事である。

また、同書巻頭の歌は

妻子らをともし移り國なまりかはれる土地に住みなれむとす
移りこし鹿児島の家はヴェランダの向ふに青く櫻島晴る

であり、四十代後半で家族と共に移り住んだ鹿児島¹の地に対する抱負と不安とが偲ばれる。

中村は県立女子専門学校校長であるが、国文科・英文科の文学概論、ドイツ語も担当している。

新設の国文科・英文科に着任した他の教員も、男子の高等教育機関であった旧制第七高等学校に劣らぬ人材であった。国文科に限ってみても、近世・近代文学を担当した松浦一六は、東京大学文学部国文科を卒業後、旧制第七高等学校教授となり、その間、『西鶴織留新註』を上梓、近世文学の研究者として知られた存在であった^{注6}。戦争中は静岡で教鞭を執っていたが、県立女子専門学校設立にあたり、国文科教授に招請された。古事記や万葉集、源氏物語等古典文学を担当した横山新十郎は、戦前は旧制の鹿児島第一中学校で教鞭を執っていた。

^{注7} 単著こそないものの、昭和十二年には日本古典文学に関する論集の編著者となっているほか、国語教育についても業績がある。中国文学（漢文）を担当した塩谷充夫は唐詩を中心とした漢文学全体に広い見識を持っている^{注8}。

先述したように、県立女子専門学校は誕生と同時に数年後の廃止が決定していた。問題は新たな学校教育法の下、どのような高等教育機関に移行するかであった。女子専門学校自体は四年制大学への昇格を考えていたようで、在学生・卒業生による昇格運動も行われていたが^{注9}、最終的には昭和二十四年六月に学校教育法の一部改正が行われ修業年限二年、ないし三年の短期大学の制度が作られたことにより、県議会の審議、文部省の設置認可を得て、昭和二十五年四月に鹿児島県立大学短期大学部として、共学の短大に移行した。県立女子専門学校は最後の卒業生を送り出した昭和二十六年三月にその幕を閉じた。

鹿児島県立女子専門学校はこのように、男子と同等の高等教育機関

として設立されたものであったが、「男子と同等」は教育だけではなく学生の自治活動についてもそうであろうとした。すでに戦前の第一高女専攻科時代の昭和四年六月一日に専攻科自治会が創立されている。これは専攻科生徒だけではなく専任教員も会員とするもので、自治会の目的は「以て師弟の情誼を厚うし、親睦を図り、知徳体三方面的の教養鍛錬を実施励行せん事」とあり^{注10}、現在の学生自治会とは異なる性質のものである。しかしながら、戦前に民主的自治活動を行っていたことは注目に値する。この自治会は県立女子専門学校にも引き継がれた。

合唱部や句会、短歌会、「女専文芸」の創刊などのサークル活動のほか、高尾野に移転していた第七高等学校の鹿児島市復帰運動への応援や引揚者救援活動など社会的活動を七高生や県立医学専門学校、農業専門学校、経済専門学校などの男子学生と共同して行った。^{注11} 社会的活動は第一高女専攻科の自治会も行っていたが、男子の旧制高等学校や高等専門学校との共同作業は女子専門学校になつてからのものである。これは全国的女子専門学校や女子大学でも同様の傾向であった。

田中智子は

日本の大学学生自治会は、第二次世界大戦直後から数年の間に多くの高等教育機関において設立された。戦後の大学学生自治会の形成過程および活動の背景について、先行研究をみると①政府による「上からの民主化」、および②学生たちによる自然発生的な学國民主化運動とそこにおける日本共産党の指導を要因としてあげている場合が多い^{注13}。

といい、しかしながら同時に

大学学生自治会の結成やその初期の活動に影響を与えた要因の一つに占領軍の動向がある。

とも述べ、その一つの事例として、一九四七年から四八年の旧制女子専門学校における学生自治会改組に対する助言を挙げている。これはすでに戦前からあった日本女子大学校や津田塾女子専門学校等の東京の私立学校に対するものであったが、

同年6月29日には「明朗な学生自治生活促進に力を尽くされてゐたG・H・Q教育部のホームズ博士の示唆により、自治生活の体験を語り合ふべく」全国女子専門学校学生会協議会が開催されている。

この会議はその後、49年5月に全国女子学生協議会と名称を変えて恒久的組織となっている^{注14}。

としている。この、第一回の全国女子学生協議会に県立女子専門学校から学生代表が参加しているのである。このことは、県立第一高女専攻科・県立女子専門学校同窓会による記念誌や、県立短期大学四十周年誌にも記述はないが、前述の山下道代が二〇一三年（平成二十五年）に書いた随筆「佐保路」の中で言及している。

はじめて奈良に行ったのは、昭和二十四年五月、終戦から四年目のことである。

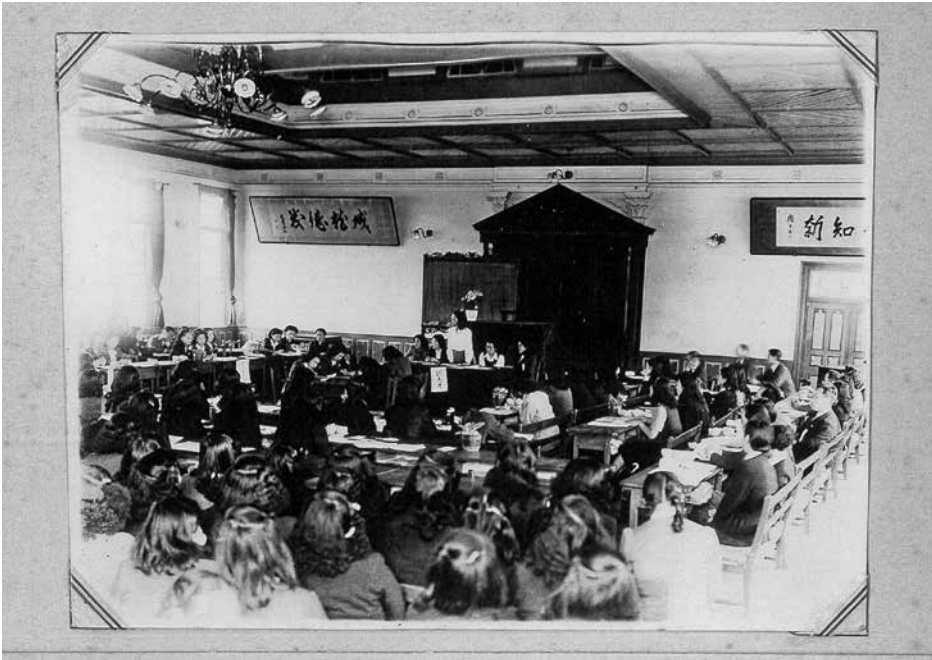
全国女子学生協議会第一回全国大会というのが、奈良女高師を会場として開催され、それに出席するためであった。当時はまだ旧学制下で、私は郷里の女子専門学校（筆者注：鹿児島県立女子専門学校）国文科の二年生になったところ、その会議には一年上級の英文の人と二人で出席した。

ちょうど、戦後学生運動のはじまりの時期である。この前年には、かの全学連が結成されていた。女子学生だけの全国組織を持つというところで、その最初の会合であったのだが、行ってみたら会場には、進駐軍CIE（民間情報教育局）の人物が、アドバイザーと言うことで通訳を従えて着座していた。これは、

当時各地の大学高専の学生自治会に対してなにかと口を出し、学生側の激しい反発を受けていた人物である。そのときの日本は、占領下であった^{注15}。

山下は、この会議を全学連結成と関連付けて捉えていたようだが、先の田中論文に出てくる占領軍（進駐軍）の助言によるものである。山下は「その会合でそんなことを討議したのであったかもうほとんど覚えていない」と言っているが、進駐軍CIEが同席していることに違和感を持っていたようでもある。しかし、山下が遺した写真を見ると、全国から参加した女子学生たちの熱気が感じられ盛会であったことがわかる。鹿児島県立女子専門学校からの参加者二名分の旅費などの経費が学校当局から出たのか、自治会から出たのかは不明だが、鹿児島県立女子専門学校が女子の高等教育機関として、全国的女子専門学校や女子大学校と連帯しようとしていたことは明らかである。

(全国女子学生協議会1)



(全国女子学生協議会2)



以上見てきたように、鹿児島県立女子専門学校は、戦前の鹿児島第一高女専攻科の伝統を受け継ぎつつ、戦後の新たな女子の高等教育機関として、県内の向学心に燃える女子学生の期待に応えていた。

では、実際にどのような女子学生が在学していたのか、最初に紹介した山下道代の生涯を本人執筆の随筆や年譜によつてたどりた。

二 山下家の両親・きょうだい

山下道代は昭和六年（一九三一）、鹿児島県日置郡串木野町上名に父山下平太郎、母カメケサの次女として生まれた。上に長男太利、次男治美、三男憲良、長女悦が、下に三女京子がいる六人きょうだいの五人目である。長男太利は大正八年（一九一九）で、道代とは一二歳離れている。すぐ上の姉悦も大正十四年（一九二五）生まれなので六歳差である。^{注16} 子どもの頃は年の離れた兄姉とは遊ぶことはあまりなかったようだが、東京高等師範学校・東京文理科大学を卒業して熊本大学教育学部教授となった長兄太利のことは尊敬するとともに兄のようになりたいという競争意識を持っていたという。^{注17}

串木野の山下家を継いだのは次男の治美である。治美は三井金属に勤めたあと出征、マレーシアのパナン島からインパール戦線に送られたが、無事帰国し、再び三井に勤めた。

三男の憲良は分家して串木野で農業を営んだ。長女の悦は看護婦として伊敷国立病院に勤めたあと大阪に嫁ぎ、三女京子は女学校を卒業後、関東で就職しその地で結婚している。^{注18}

長男太利が平成六年に勲二等瑞宝章を受章した記念にまとめた『軌跡』の「生い立ちの記」によると、山下家は祖父の代に地元の貴族院議員の弟の借金の保証人になったために家屋敷を失うことになり苦しい生活だったという。また、次男治美の娘で現在神村学園高等部教諭の山下朱美氏によると、当時の山下家の主な現金収入はデンプン用サ

ツマイモを栽培し、年に二度収穫したサツマイモを換金する事だったという。^{注19}

三 県立女子専門学校入学まで

山下道代の県立女子専門学校入学以前については、幼少時の思い出がいくつかの随筆にまとめられているのみだが、国民学校を卒業後は鹿児島高等女学校に入学したらしい。串木野駅から国鉄を利用しての通学であった。

山下道代は随筆「棟の木陰」の中で「生家は西に向かって高くつき出すシラス台地の上にあつたので、どこに行くにも小さな谷を通って台地をくだらなければならなかつた。」と書いている。また兄太利の「生い立ちの記」にも「自宅から学校（筆者注：串木野尋常高等小学校）まで、通学は二つの坂道を登り下りする約二kmの行程であつた。」と書いている。灯りもない細い山道を下つて駅まで行くのである。当時串木野駅から西鹿児島駅までは一時間ほどかかっていたし、駅から高等女学校までは、また歩かなければならない。したがって、六時三十分の汽車に乗るために家を出るのは早朝五時三十分頃だったらしい。

山下朱美氏は母（道代の兄治美の妻）から聞いた話として、道代の母カメケサは道代と妹京子のために朝四時には起きて弁当を作り、毎朝毎晩提灯を持って台地の下まで道代を送り迎えしていたという。台地の山道は、谷を出たところで「また少し下ると平地となり、道幅が急に広くなる。旧武家集落のいわば中央通り、馬場で、ここまで来ると通学のために駅に向かう生徒が増え、道代は彼らに合流し、母は帰宅したという。朱美氏の母が姑であるカメケサに嫁の自分も弁当作りの手伝いと言ったところ、「これは私の仕事だから、あなたは寝ていい」と言つて決して代わらなかつたそうである。朱美氏は、まだ年若い嫁を氣遣つたというよりも、娘の教育は自分が責任を持つという

意志だったのではないか、或いは自分がうけたかった教育を娘に託す
思いだったのではないかと述べている。

また、女学校入学のころ、母に連れられて短歌会に参加するように
なった。母の遠縁が中心となつて作つたものであつたらしい。^{注20}

四 県立女子専門学校での生活

道代が県立鹿児島女子専門学校に入学したのは開学二年目の昭和
二十三年（一九四八）四月である。この年、県立女子専門学校は葉師
町の旧制第一中学校跡地から現在の県立短大がある伊敷の陸軍兵舎跡
に移転した。^{注21} 道代は十七歳であつた。現在の短大入学よりも一年早
いが、これは旧学制下では初等中等教育が十一年間であつたためであ
る。国文科の入学生は三十名。戦中戦後の混乱期であつたためか、「入
学時の年齢には幅があり、女学校卒業したての人、社会生活を経験し
た人、既婚者の方や未亡人など」^{注22} さまざまな事情の人がいたようだ。
女子専門学校の国文科二期生の担任は松浦一六教授で、松浦は女專
文芸の顧問もしていた。道代も女專文芸第二号に短歌四首を載せてい
る。第一号が出されたのが、昭和二十三年の第一回卒業式に合わせてで
あつたので、第二号は第二回卒業式に合わせての発行で昭和二十四年の
ことと思われる。道代は二年生である。

この年の五月、先述の第一回全国女子学生協議会に県立女子専門学
校代表として出席している。その内容についても先述の通りであるが、
道代個人にとっては、その後の人生に大きな影響を与える出会いが
あつた。「左保路」にこのようにある。

二日にわたる会議日程のすべてが終わつたのち、会場校であつ
た奈良女高師の先生方が、奈良近辺の寺々を三コースに分かれ
て案内してくださることになった。三コースとは東大寺・興福
寺コース、西の京コース、法隆寺コースというもので、これは

自由参加であつた。英文の上級生は京都に親戚があるとか言つ
て急いで帰つていったので、私は一人居残つて西の京コースに
参加した。

西の京コースとは、葉師寺・唐招提寺と秋篠寺をめぐるもの
であつたが、これがその後の私を奈良へ結びつける決定的な契
機となつた。

山下道代は後年、和歌を中心とした古典文学研究と観世流能楽の稽
古に傾倒するが、そのきっかけの一つはこの時にあつたのかもしれない。

翌年、三年生になつた道代は卒業論文に取り組むことになる。当時
の鹿児島県立女子専門学校国文科のカリキュラムを見ても^{注23}、「卒業
論文」あるいは「卒業研究」と言う科目はなく、これがどのような経
緯で書かれたものかは不明である。しかし、「有心考」と題されたそ
の論文は、藤原定家の歌論の根幹をなす「有心」について、定家の歌
論、歌合判詞から用例を抽出、分析検討したもので、四百字詰め原稿
用紙二百三十枚余の本編と百二十九枚の資料編から成る。全体は序論
と本論五章および結論から構成されており、分析対象、分析方法と参
考文献を明記した堂々たる論文である。本編の後に付された後記に
一九五〇年八月二〇日の日付があることから、三年生の夏期休業期間
中に書き終えたことがわかる。資料や参考文献の少ない当時の研究水
準を考えると、質量ともに現在の四年制大学文学部の卒業論文のレベ
ル以上で、修士論文としても高水準ではないかと判断できる。執筆時
二十歳とはとても思えない力作で、鹿児島県立女子専門学校の教育水
準の高さが偲ばれる。この論文執筆の指導に当たったのが誰であるか
ははっきりしないが、藤原定家の歌論を対象としていることから、和
歌に関する研究業績のある横山新十郎がその任に当たつたものと思わ
れる。

この論文については、長男の栗澤極氏が「小学生の頃、家の本棚にあったのを記憶しています。その後、何回か引越しましたが、常に手元に置いていました。一生続いた研究生活の第一歩、出発点なのであろうと思います」とのコメントを寄せておられる。



写真は、卒業論文を書き上げた時の自宅でのスナップだが、晴れ晴れとした表情をしている。この場所は長兄太利が鹿児島師範学校に在学していた時まで勉強していた場所で、後ろの書物の多くも長兄のものとのことである。道代はここで論文執筆に励んでいたとのことだが、山下朱美氏が母親に聞いた話として、この場所は、四畳半の仏間の南側の一角であり、朱美氏の母が仏壇にお供えを上げに行くのにふすまの開け閉めの音が大きいと、道代に叱られた。道代にとっては兄嫁に当たり、年齢も近く、ふだんは仲が良かったが、勉強中はいへん集

中していて物音などで邪魔が入るのが我慢ならなかったようだという。

五 国立国語研究所入所

こうしていよいよ卒業を迎えるわけだが、国文科の卒業生の多くが鹿児島で教師になり、他も会社や雑誌社に就職などしていた中、山下道代は開設したばかりの国立国語研究所に入所することになる^{注24}。所属は地方言語研究室で、室長は言語学者の柴田武であった^{注25}。

国立国語研究所は昭和二十三年（一九四八）十二月に公布施行された「国立国語研究所設置法」に基づき、国語に関する総合的研究機関として「国語及び国民の言語生活について、科学的な調査研究を行なう」べく発足した。当初は東京都新宿区の神宮聖徳記念館の一部を借りて庶務部と二研究部、庶務部五人、研究員三〇人の小さな所帯だった^{注26}。道代が入所したのはその三年後の昭和二十六年（一九五二）、それほど大きな変化はなかったと思われる。国立国語研究所はそれまでの大学では扱わなかった現代語を対象として生きた日本語、言語生活の実態を研究することを重要な研究課題としていた。

発足したばかりの小さな研究所とはいえ、戦後日本の新しい日本語研究を科学的に行う機関に、鹿児島女子専門学校を卒業したばかりの女性がどうして所員となることになったのか、その経緯は不明である。国立国語研究所の仕事に、日本の各地の言語生活の実態調査と「日本言語地図」の作成があり、そのために全国各県に一人ずつ地方調査員を委嘱する制度があった^{注26}が、道代は最初から上京して入所しており、地方調査員ではなかった。朱美氏が道代の長女泉氏から聞いた未確認の話として、生前、県立女子専門学校在学中に新聞に投稿した文章（短歌？）が国立国語研究所の所長の目にとまり採用が決まったと話していたという。きっかけは新聞への投稿だったかもしれないが、当時の県立女子専門学校には校長の山本や国文科の松浦など東京大学

文学部出身の者もあり、その関係で採用の話がまとまったのであろう。上京した道代は長兄太利も世話になった遠縁の親戚の世話で住居を決め、国立国語研究所での仕事が始まった。在職期間は結婚を機に退職するまでの五年間であったが、その間の国立国語研究所の研究成果として『敬語と敬語意識』がある。発行は道代退職後の昭和三十三年（一九五七）三月だが、国内のいくつかの地方都市での詳細な調査結果を統計数理研究所の協力を得て統計学の手法で処理・解析したものである。道代も方言言語研究室の一員として調査・研究の一端を担ったものと考えられる。

国立国語研究所での具体的な役割は不明だが、この五年間で道代は言語に対する科学的な分析方法を学んだものと思われる。もともと卒業論文の「有心考」でも定家の歌論や歌合判詞を分析考察していたが、より専門的で先進的な手法を学んだことは、後に独学で平安朝和歌の研究を行っていく大きな力になったに違いない。

国立国語研究所ではもう一つの道代の生涯を通じて打ち込む事になるもの、観世流能楽に出会っている。当時、国立国語研究所所員と観世流の若い能楽師が共同で謡曲詞章についての勉強会を行うことがあり、それをきっかけに観世寿夫師および観世静夫師の当代一流の能楽師から謡の稽古をうけることとなった。それは昭和二十七年（一九五二）から二十九年までの二年間であったが、その後、結婚出産を経て昭和三十九年（一九六四）から正式に観世流準職分高橋正次郎師に入門し、昭和六十一年には観世宗家から名誉師範の允許を受けるまでになる。平成十年からは、静夫師の長男である暁夫師（九世観世鍔之丞）に入門し、亡くなるまで稽古を続けた^{注27}。

六 国立国語研究所退所以降

山下道代は昭和三十一年（一九五六）、結婚を機に国立国語研究所

山下道代と鹿児島県立女子専門学校

を退所した。翌年一月に長男が誕生し、しばらくは育児に専念する。昭和三十五年には主婦の友社に編集部記者として入社するが、長女の誕生を機に三年後に退社する。道代が執筆活動始めるのは長男が大学を卒業する頃の昭和五十三年（一九七八）で、短歌雑誌『長流』に「わたくしの伊勢物語」の連載を開始している。これ以降、随筆・評論・研究については旧姓の山下を使い山下道代名義で行っているが、昭和五十四年（一九七九）、鹿児島県立短期大学文学会の『人文』第三号に掲載された「花鏡」の性格―故観世寿夫先生に―だけは結婚後の栗澤道代名義になっている。『人文』は鹿児島県立短期大学の文学系教員によって昭和五十一年に創刊された論文誌だが、卒業生の論文が載ることはほとんどない。この当時、鹿児島県立女子専門学校から引き続き国文科の教授を務めていた松浦と横山は昭和四十三年、四十五年それぞれ退職していたが、塩谷充夫は在職していた。この論文の掲載経緯については、『人文』第三号編集後記等にも言及はなく不明だが、おそらく、県立女子専門学校卒業後も連絡を取っていた道代に、塩谷かあるいは退職した横山が執筆を依頼したものと推測される。旧姓の山下道代名義になっていないのは、人文学会が旧姓使用を認めなかったのかもしれない。

昭和六十二年（一九八七）には『長流』に掲載した文章を一冊にまとめ、最初の著書『古今集 恋の歌』として筑摩書房から出版している。あとがきには「古典評論」とあり、この前後、『長流』以外の媒体に掲載した文章には自らの肩書きを「評論家」^{注28}あるいは「長流」同人^{注29}としている。山下道代が自らを「和歌文学研究者」と自認するのは、平成八年（一九九六）にお茶の水大学名誉教授関根慶子博士との共著で『伊勢集全釈』を風間書房から刊行してからである。この共著の経緯について道代は、平成十一年（一九九九）に刊行された『低き心高き志 関根慶子先生追悼文集』^{注30}に寄稿した「驚宮駅前通り」に次の

ように書いている。

一九九〇年に刊行した私の『王朝歌人 伊勢』もまた、先生のあの精緻周到なご研究があつたればこそ、着手できた仕事でした。本ができたあがつたとき、その一冊にお礼の手紙を添えて、先生へお届けしました。もちろん私はまだ一面識もいただいていない者、ご住所は調べて榛名と知りました。

すぐに目を通していただけるとは思いませんでした。ましてご返事など、期待だにすることはありません。なのに、先生からおはがきをいただいたのです。

こうして、関根慶子との交流がはじまり、二年後に『伊勢集全釈』の共著の話がもたらされる。共著とはいえ、注釈作業のほとんどは道代の手になる。

仕事をはじめることになったときの、先生のおことばは忘れません。「決して、だれにも、遠慮することはない。自分の考えのとおり存分に書きなさい。」と。事実、『全釈』の作業に関しては、先生ご自身からさえ、指図めいたおことばは一度もうかがいませんでした。けれども、こちらからご相談したり、進行情況をご報告したりしたときには、折返してすぐにご返事をくださいました。先生のご返事は、いつもいいねいなおことばで、しかも明快そのものでした。

『伊勢集全釈』の関根慶子によるあとがきにも

山下道代氏は『王朝歌人 伊勢』の原著を公にされ、先に『歌語りの時代』も著されて、この方面に造詣深くあられたので、この度この原稿は、私との責任において、同氏が執筆されたものである。私が筆を入れ却って改悪になった所もあるかとおそれる。

と、本書のほとんどが道代の執筆であること、と同時に内容には関根

が責任を持つとの心のこもった文章が記されている。奥付にある執筆者にはお茶の水女子大学名誉教授 関根慶子と、鹿児島県立女子専門学校国文科卒業 山下道代が並び、道代が独立した和歌文学研究者である証となっている。これ以降、山下道代は自らの肩書きを「和歌文学研究者」としている^{注31}。

その後も道代は精力的に執筆活動を続け、和歌文学にかかわるものだけで単著九冊、共著五冊を数える^{注32}。

共著のうち四冊は、お茶の水女子大学の平野由紀子が代表者を務める古今和歌六帖輪読会による、『古今和歌六帖全注釈』第一帖から第四帖である。先の『伊勢集全釈』が契機となり、平成十二年(二〇〇〇)十一月から輪読会メンバーとなり、注釈作業を分担した。古今和歌六帖は平安中期の和歌や物語を読むために必要不可欠な作品だが、まとまった注釈や研究が少ない。類題和歌集だが、題には他の歌集には見えないユニークなものも多く、注釈が難しい作品でもある。『全注釈』は残りの第五帖、第六帖についても出版の予定だが、第四帖の出版原稿が成ってまもなくの平成三十年(二〇一八)十月十六日早朝、自宅で急逝する。享年八十九歳。日ごろ、研究活動は早朝の静謐な環境で行うことが習慣だったそうで、書斎の机で亡くなっているのを家人が発見されたという^{注33}。

県立短大に寄贈された著作、とくに『古今和歌六帖全注釈』には全体にわたって、細かな修正、加筆の付箋が付けられており、最後まで研究者として誠実に作品・著作に向き合った姿勢がうかがえる。

七 山下道代と鹿児島県立女子専門学校

自筆年譜を見ると、二十歳で鹿児島県立女子専門学校を卒業して国立国語研究所に入所したのは、たしかに女子専門学校時代の学業の成果といえるかもしれない。しかしその五年後に結婚を機に退所してか

らの三十年あまりは、家庭人として夫を支え子供たちを育てる生活である。謡と仕舞の稽古や長流同人としての作歌活動はあるが、打ち込んだとはいえ趣味の領域にも見える。執筆活動を本格化するのには二人の子どもが結婚し、夫が定年退職してからである。ここにも、道代の研究に対するはじめと覚悟がある。そして執筆活動を本格化してから亡くなるまでの約三十年、精力的に本を出している。六十歳近くになってからの三十年間で単著九冊（歌集を含めれば十冊）、共著五冊というのは、強い意志と集中力、明晰な知力がなければできないことである。これについて、姪に当たる山下朱美氏はあるエピソードが印象に残っているという。

道代は結婚してからは郷里串木野に帰る機会は年に一度あるかないか、子どもが小さい頃は夏休みに数日間滞在することもあったようだが、その後はその回数も減っていた。調度、二作目の著作『王朝歌人伊勢』を出した頃、帰省の機会を得た道代は、朱美氏に「これから歴史に残る本を十冊書く」と語ったという。朱美氏はそのことばに、熊本大学教育学部を定年退職後熊本工業大学教授を務めていた道代の長兄、太利に対するライバル心を感じたそうである。太利は東京文理大学で物理学を修めた理系の研究者だが、熊本工業大学を定年退職後『不知火の研究』を葦書房から出版している。道代も自分もアカデミズムの世界で実力を発揮したいという思いがあったのではないか。

結果的に道代は朱美氏に語ったとおり、共著も含めれば十冊以上の学術書を発表した。これには家人の理解も必要である。夫の栗澤衛氏は道代の随筆の連載や著作の出版を楽しみにしていたそうである。しかし、これらの著作を結婚後の栗澤姓ではなく、旧姓の山下道代で発表したのは、家庭生活と研究生活を分けるという意味の他に、文筆家・研究者としての自分の基盤が県立女子専門学校での教育と国立国語研究所での五年間にあると考えていたからではないだろうか。

先に述べたように、道代の県立女子専門学校通学は母カメケサの協力無しには叶わなかった。父平太郎も家長として子供たちの進学に賛成したのはもちろんだが、学費等を支えたのは女性親族だった。長兄太利の進学費用は、助産師をしていた平太郎の妹の婦治（ふじ）が援助してくれたという。道代は進学にあたり、日本育英会の奨学金を得たが、当時鹿児島県で唯一の奨学生とのことである。この奨学金については、道代の卒業・上京後に一家がサツマイモを売って得た収入で返済したという。朱美氏によると母カメケサの兄は串木野で司法書士をしており、カメケサもできれば上の学校まで行きたかったのではないかとのことである。

鹿児島県立女子専門学校は戦後わずか四年間しか存続しなかったが、在学生だけでなく、その母や親族女性の教育への渴望に応える高等教育機関であった。だからこそ、在学生たちを中心とした県立女子専門学校の四年制大学昇格運動も温かく見守り支援していったのであろう。

注1 栗澤（山下）道代長男、栗澤極氏から著作十五冊、直筆原稿多数。

短歌誌『長流』等掲載随筆多数。直筆年譜、写真等

注2 鹿児島県立第一高女専攻科・鹿児島県立女子専門学校同窓会

あふち会編『あふち芽生えて 六十周年記念誌』昭和五十七年

（一九八二）

鹿児島県立第一高女専攻科・鹿児島県立女子専門学校同窓会
あふち会編『あふち薫りて 八十五周年記念誌』平成二十年

（二〇〇八）

注3 鹿児島県立短期大学四十周年記念誌編集委員会編『鹿児島県立

短期大学四十周年記念誌』平成二年（一九九〇）

注4 『南日本新聞』昭和二十二年（一九四七）六月一六日

注5 中村政雄歌集『手ざはりかたき夏草』後記 創作社昭和三十二

年（一九五七）

注6 注2前掲書 第二部女専の時代「各科の特徴と違い」国文科

注3前掲書「第二章 専門教育課程」注7 注6に同じ

注8 注6に同じ

注9 注2前掲書 第二部女専の時代「短大への転換と4年制昇格運動」

注10 注2前掲書 第三部きずなと足跡「自治会」

注11 注2前掲書 第二部女専の時代「学校行事と自治活動」

注12 注10に同じ

注13 田中智子「日本の大学学生自治会に対する占領軍の見解 C I E会見録の分析から」『日本の教育史学』六五巻 pp. 61-74 令和五年（二〇二二）

注14 注13に同じ

注15 山下道代未発表原稿「左保路」平成二十五年（二〇一三）十月十五日

注16 栗澤極氏書簡（令和六年（二〇二四）六月）による

注17 山下朱美氏インタビュー 令和六年（二〇二四）八月六日 於 神村学園高等部

注18 注16 栗澤極氏書簡、注17 山下朱美氏インタビュー

注19 注17インタビュー

注20 「石田耕三氏弔辞」『長流』平成十五年（二〇〇三）四月号

注21 注2前掲書

注22 注2前掲書 第二部女専の時代「各科の特徴と違い」国文科

注23 注22に同じ

注24 山下道代自筆年譜

注25 山下道代未発表原稿「ガ行鼻濁音」平成二十七年（二〇一五）三月六日

注26 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所

ホームページ「写真で見る国立国語研究所の歴史」<https://www2.ninjal.ac.jp/photo/>

注27 注24に同じ

注28 「鈴振りの話」『やまぐち』昭和六十三年（一九八八）一〇月号

注29 「頂峯院里の坊」『南日本新聞』平成元年（一九八九）二月二十六日

注30 「驚宮駅前通り」関根慶子博士追悼文集刊行会編『低き心 高き志 関根慶子博士の生涯』風間書房 平成十一年（一九九九）

注31 「小町の能 入門」『DEN』21号平成十四年（二〇〇二）

注32 別紙山下道代著作一覧

注33 注17インタビュー

付記

貴重な資料を御寄贈いただきお手紙で山下道代氏について多くのことを教えていただいた栗澤極氏、お忙しい中時間をとってインタビューに応じていただいた山下朱美氏に深く感謝申し上げます。

二〇二四年 十月一日

山下道代著作一覧

◎単著

一九八七年三月 古今集 恋の歌（筑摩書房）

二〇一二年三月 古今和歌六帖全注釈第一帖 読会 古今和歌六帖輪

一九九〇年一〇月 王朝歌人 伊勢（筑摩書房）

二〇一二年六月 古今和歌六帖全注釈第二帖 読会 古今和歌六帖輪

一九九三年七月 歌語りの時代（筑摩書房）

二〇一六年七月 古今和歌六帖全注釈第三帖 読会 古今和歌六帖輪

二〇〇〇年三月 古今集人物人事考（風間書房）

二〇一九年一月 古今和歌六帖全注釈第四帖 読会 古今和歌六帖輪

二〇〇三年一月 伊勢集の風景（臨川書店）

二〇〇六年四月 陽成院―乱行の帝―（新典社）

二〇〇八年十二月 みみらくの島（青簡舎）

二〇一〇年八月 歌枕新考（青簡舎）

二〇一四年一〇月 藤原兼輔（青簡舎）

二〇〇六年九月 歌集・八成（短歌研究社）

◎共著

一九九六年二月 私家集全釈叢書伊勢集全釈（風間書房）

お茶の水女子大学名誉教授関根慶子氏との共著

